

〔駒沢女子大学 研究紀要 第25号 p.63～80 2018〕

日光におけるアーネスト・サトウと武田久吉

井 戸 桂 子*

Ernest Satow and Hisayoshi Takeda in Nikko

Keiko IDO*

はじめに

日光の二社一寺（東照宮、二荒山神社と輪王寺）は、平成11（1999）年に世界文化遺産に登録され、内外から年間270万人という多くの観光客を迎えている。東照宮では平成27（2015）年に400年式年大祭を斎行し、平成29（2017）年に国宝「陽明門」の大修理が完成した。輪王寺では総本堂の重要文化財「三仏堂」の大修理をほぼ終えた。陽明門の鮮やかな色彩も三仏の金色の輝きも蘇った。

いろは坂を登った中禅寺湖畔では、イタリア大使館別荘と英国大使館別荘が、冬期を除いて栃木県の記念公園として一般公開されている。どちらの別荘からも、中禅寺湖の碧い湖水と新緑から紅葉へと変化する周囲の山々とを一望でき、往時の外交団の交流がうかがえる。

現在の賑わいは、日光観光の中心である山内の社寺の歴史文化的な価値と、奥日光の中禅寺湖畔の自然の魅力に拠るところが大きい。

しかし、この日光の社寺と自然美が今日のような世界的な注目を得るには、古来よりの日光の意義を変革した明治期の転換が、大きく関わっている。そしてその転換に際して、ある父と子の存在を無視することは出来ない。アーネスト・サトウ、Ernest Satow（1843～1929）と彼の次男、武田久吉（1883～1972）である。

日光の歴史が大きく変化した明治初期に、イギリス外交官アーネスト・サトウが日光の存在を横浜の英字新聞に紹介し、そして、父と同様に日光で山に親しんだ武田久吉は、登山と植物研究をライフワークとしたのである。

本稿では、まず、奈良時代から明治初期までの日光山の歴史を振り返り、日光は従来どのような存在であったかを指摘する。次に、明治以降の日光の変革に際して、サトウがどのような影響を与えたかを考察する。そして、明治後半からの新たな視点として画家たちの文化サークルと植物研究に言及して、武田久吉の活動の意義を探りたい。

第1章 明治初期までの日光

第1節 開山と霊場 ～神仏習合～

日光の地に初めて入ったのは、下野地方出身の僧、勝道上人（735～817）である。766年、いまの神橋のそばに草庵を結び、四本龍寺を創建した。その後、苦行練行の末、782年、補陀洛浄土の霊山（二荒山、すなわち現在の男体山）に登頂し、山頂に祠を祀った。そして生涯をかけて山中各所に権現を奉祀し、千手観音像を造立し、神宮寺を開創するなど、霊山日光山の基礎を据えた。平安初期（810年）、山内の四本龍

*人文学部 国際文化学科

寺は、勅願を満ずる「満願寺」の称号を賜ることとなる。

勝道上人入寂の後も、弟子たちが蹟業を継ぎ、日光の山を巡る三峰五禪頂などの後年の修行を伝えていった。その後、空海や円仁の来見（日光訪問のこと）の説もあり、また、鎌倉幕府の源頼朝の帰依も得て、関東の一大霊場として栄えていく。ことに鎌倉時代延慶元（1308）年、親王の長子、仁澄大僧正が第28世座主に就任し、その後一時途絶えるものの、日光山の皇族座主が始まった。室町時代を通じて所領18万石、院僧房は500を超え、日光山は関東の比叡山と称された。まさに修験の一大霊場であった。^{注1)}

第2節 江戸時代の繁栄 ～日光詣～

しかし、奈良時代から発展を遂げてきた日光山の勢いは、天正18（1590）年に頓挫する。豊臣秀吉の小田原戦役に於いて北条氏に加担したため、秀吉の怒りを買ひ、領地は没収され足尾郷700石のみとなった。ついに慶長18（1613）年、日光山第52世が職を退き、勝道上人の伝統は途絶えた。同じ年、天海が第53世に就任し法脈は保たれたものの、まもなく中世の霊場とは異なる立場が日光に与えられた。

すなわち、元和3（1617）年、天海の進言のもと幕府は家康の遺言により遺骸を日光山に遷座し、東照社を創設したのである。家光による寛永年間のさらなる造営を経て、正保2（1645）年には宮号を勅賜され「東照宮」となり、この後、幕末まで毎年朝廷から幣帛を捧げる例幣使が遣わされた。

そして、幕府の直轄地となり、承応2（1653）年に家光廟の大猷院廟が建設されると、日光山領は13,600石を数えた。

霊山全体としては、明暦元（1655）年に守澄法親王（後水尾天皇の皇子で、前年から日光山貫主）が輪王寺宮号を朝廷から賜わり、ここに、

東照宮・大猷院廟を中心とする一山を輪王寺宮が管領するという独特の形態が生まれた。日光山は宮門跡を頂く聖地として栄えていく。

こうして江戸時代、家光の4回を筆頭として將軍家、朝廷からの例幣使、大名、琉球や朝鮮通信使が日光参詣を行った。やがて参詣はこれら支配階級の人々だけでなく、一般にも及んでいく。学者や文人も同地を訪れ、文章を残した。例えば、早くは林羅山（承応2年、1653年）や松尾芭蕉（元禄2年、1689年）の来見があり、そして正徳3（1713）年、貝原益軒は『東路記』に紀行文「日光名勝記」を収める。さらに江戸後期、八王子千人同心の植田孟緡は日光勤番中に山を巡り観察し、当代の絵師および自身による図絵も添えて、『日光山志』（10冊）をまとめた。同書は1824年に幕府へ献上されただけでなく、1837年に刊行されたので、当時の日光への注目度がうかがえる。^{注2)}

そして庶民も日光参りに出かけた。参詣を案内する「堂者引き」という案内人は当初よりあったが、享保年間には組織化され、現在に至っている。天保13（1842）年に大猷院の修理が成り、翌年、家慶が將軍による最後の社参を行う頃には、その勢いから、35,042名という参詣者記録がある。信者の団体である講も組織され、庶民もお伊勢参りほどではないが、日光詣でに出かけたのである。東照宮の匠の技を結集した壮麗な結構を讃える「日光を視ずば結構の語を発すべからず」という諺も生まれた。

このように、中世までが主に修験道の神仏習合の霊山であり修行中心の場であったとすれば、江戸時代は、少し門戸が広がった。なぜなら、東照宮参詣によって国家安寧を祈るという、内外に向けた宗教的中心地だからこそ、移動に制限のあるこの時代にも拘わらず、人々が赴くことが出来た行先となったからである。伊勢神宮詣や富士講で人々の移動が許されたように、日

光は上は將軍家から下は庶民までの参詣先となった。

第3節 維新から明治初期 ～時代の荒波～

日光は明治維新によって一大変革の時を迎えた。

慶應4年、すなわち明治元（1868）年、徳川の靈廟を擁する日光は、最大の危機に陥った。4月、旧幕府兵3,000人が宇都宮から背走し日光山に拠っていたからである。しかし官軍参謀板垣退助と一山総代桜木道純の話合いの結果、日光は町家並、堂塔伽藍すべて兵火を免れた。旧幕府兵は日光を去り会津へ向かい、官軍は今市へ撤収した。

それもつかの間、8月、日光神領は明治政府に接収され、日光奉行所は廃止され、真岡県の管轄となる。その後、日光県さらに栃木県の管下となる。

宗教的には、明治4（1871）年、二社一寺の分離の指令が栃木県札から通達される。勝道上人以来の神仏和合は終わり、堂塔伽藍移転が起こり、もちろん経済的窮乏にも見舞われる。多くの衆徒や幕吏は四散し、日光は一時期、大混乱状態に陥った。これまで日光は、修験道なり社参などの日光詣なりで、来見者を惹き付けてきたのに対して、明治維新で生活基盤が変革し、今や、それどころではなくなった。そして来見者が減れば、経済的にも疲弊するのは当然である。

そのような日光に、外国人が訪れ始めた。明治4（1871）年、イギリス公使パークス夫妻が東照宮を正式参拝することとなり、東照宮側も受け入れざるを得ず、戸惑いながらも迎えた。それに端を発して、社家御番所日記によれば、「夷人、異人、外国人」の来宮におどろくも、やがてその来宮頻度が上がると、もう記述しなくなるようにまでなっていく。^{注3)} 外国人が来

見しその訪問数が上昇の一途となった直接の要因は、イギリス外交官アーネスト・サトウの英文紹介であるが、これは次章で述べたい。

一方、この混乱の中、日光内でも、町民総代たちが県に山内堂塔維持を訴えるなど努力が続けられた。明治9（1876）年明治天皇の行啓でお手許金3,000円が下賜され、三仏堂移転に際し旧観を保つようにとの有難い命を拝した。さらに明治12（1879）年、訪日したグラント大統領は日光に遊び、殿堂保護を日本側に提唱した。この流れから、内務卿伊藤博文の許しを得て、同年、有志により「保晃会」が設立された。全国に会員を募り、堂塔伽藍の修繕、境内整備の努力が始まったのである。政府による「古社寺保存法」が成立するのは、はるか先の明治30（1897）年であるので、じつに先駆的な動きであったと言える。^{注4)}

こうして、日光は外国人の注目と地元の人々の努力により、明治初期の荒波を乗り越え現在の賑わいへと至る。

日光が時代の変革に対応し、地道にその価値を継承しさらに発展させていく際に、ひときわ特筆できる存在が、イギリス外交官アーネスト・サトウである。なぜなら、彼は、霊場と参詣先という従来の日光の意義に加えて、外国人に向けて新たな魅力を紹介し、日光の価値を広げていったからである。

第2章 アーネスト・サトウ

～欧米へ伝える多様な魅力～

第1節 在日外国人への紹介 ～The Japan Weekly Mail と A Guide Book to Nikko～

アーネスト・サトウは、外国に向けた日光の事実上の紹介者である。まずは在日の外国人に向けて、次にマレー社のガイドブック発刊によって広く欧米人に向けて、日光を知らしめた。

文久2（1862）年、19歳で通訳生として来日したサトウは、幕末、パークス公使らに伴って、通訳として様々な交渉や将軍並びに天皇謁見にも立ち会った。しかし明治に入るとその華々しい任務とは一転して^{注5)}、通訳書記官という領事部門のサトウに与えられた任務は、日本各地を廻り現地で得た地誌情報を報告することであった。なぜなら、当時のイギリス在外公館は、現地の地理的条件と政治経済社会的状況とを関連して把握していたからである。極端に情報不足の明治初期、日本語の堪能なサトウがもたらす情報は貴重であった。

その日本探訪という任務の一環として訪問したのが、明治5（1872）年3月の日光と中禅寺である。前年パークス公使夫妻が初訪問の折は山内訪問だけだったが、当時賜暇休暇のため同行できなかったサトウは、今回日帰りだが雪道の中禅寺坂を登り中禅寺湖までも足を伸ばした。また、宿泊先の鈴木宅では植田孟縉の『日光山志』を見せてもらった。^{注6)}

その日光往復記を帰京直後に『ジャパン・ウィークリー・メイル』紙（*The Japan Weekly Mail*）に、3月から4月にかけて、4回にわたり連載した。^{注7)}“TRAVEL TO THE INTERIOR, YEDO TO NIKKO AND BACK March 1872”である。まさに日光がNIKKOとして記され、外国人に与えられた最初の詳細情報である。初回が江戸から日光への交通案内、第2回が日光山の歴史と「東照宮」、第3回が「三仏堂」、「法華堂」、「大猷院」の他、「本宮」、「仏の岩」や「憾満が淵」まで、第4回は中禅寺湖方面と江戸への帰路が紹介された。『日光山志』を参考としただけあって、勝道上人から筆を起こし、東照宮成立まで歴史文化を述べる。その他周囲の小さな祠や滝、さらには中禅寺湖まで紹介した。

しかし、新聞だけでは一過性なので、この記

事をまとめて一冊のガイドブックにして横浜から発刊した。明治8（1875）年の *A Guide Book to Nikko* である。ちなみにこの書は、英文ガイドブックとしては1873年の「京都」、1874年の「横浜」と「東京」に続くもので、行先として早期の登場と言える。サトウにとって初めてのガイドブックの上梓であったが、サトウが最初に残った行先が日光であったことも特筆できる。それだけ、周りから望まれていたし、本人が執筆したい対象でもあったのである。こうして、英字新聞と英文ガイドブックが、まずは在日外国人への日光紹介となった。

しかしここで注目したいのは、当初より、サトウは日光の多様な魅力に気づいていることである。英字新聞の時からすでに、周囲の美しい自然環境を指摘する。“TRAVEL TO THE INTERIOR, YEDO TO NIKKO AND BACK”の最終回に、以下のように明言する。

旅行者が日本の古い歴史や神話に通じているのであれば、ここで紹介したような聖山にある寺院や神社そして他の関心があるものを、検分しながら数日間を過ごすといだろう。もし自然を好むのであれば、近隣を探索すれば同じように興味深く思うだろうし、そしていずれにしても魅力的な場所を見つけるだろう。^{注8)}

世界遺産につながる二社一寺の存在だけでなく、日光の自然と風景を評価している。明治5年と言えば、日光は前年に神仏分離と廃藩置県、そして輪王寺の大火で本坊も焼失した状態を迎えていた時期に、サトウはこのようないわば気の向くままの自然散歩に積極的な評価を与えている。

さらに、晴れた日には高い所から宇都宮を超えて遠く筑波山まで見通せる眺望を紹介し、次の一文がつづく。

快い環境、さわやかで健康増進の環境。この地を日本の最も心地よい憩いの地とするのにこれ以上、何も必要ない。^{注8)}

まさに、「さわやかで健康増進の環境、憩いの地」日光の誕生である。修験道でも社参でもない、新たな価値をサトウは与えたのである。

第2節 健康増進の地・日光と、内地旅行允準條例

この明治5（1872）年の *The Japan Weekly Mail* での「憩いの地」という新たな魅力の指摘は、管見では、明治4年のパークス来見から明治7年の「外国人内地旅行允準條例」発布までの動きと照合するとよく理解できる。

パークス以降、来見する外国人は続いた。たとえばヘボン式ローマ字で有名なヘボン医師も訪れ、彼の知遇を得た金谷善一郎は、明治6（1873）年に自宅一部を「金谷カッテージ・イン」としてオープンさせた。さらにお雇い外国人たちは、労働条件の改善の一つとして夏休みを要求していたのだが、明治6年フランス軍事顧問団は健康のために山の空気に触れたいとして、暑中休暇を願い出て、その行先には日光を含めていた。快適に過ごす地として、サトウの指摘通り日光がリストアップされたのである。

しかし、そもそも開港以来、外国人は居留地と遊歩地域範囲外への移動、すなわち日本の「内地」(the Interior) への移動は許されていなかった。明治に入り、移動を全面的に認めてほしい外交団側と、それを許可しない日本の間で、「内地旅行問題」が起こり、難航する。主要国公使たちと外務省側は、「内地旅行」を巡ってせめ

ぎあっていたのである。サトウの記事のタイトルの通り、まさに TRAVEL TO THE INTERIOR であったのである。^{注7)}

結局、日本側は明治7（1874）年6月に「外国人内地旅行允準條例」を決定した。その第5条では、各開港地で病気になり、その「病症浴泉を要する」とき、あるいは、「空気の変換を以養療の第一」とする者は、医者証明があれば、「三十日又は五十日」の日数を限り、横浜からは「箱根熱海富士日光伊香保」での療養が許されたのである。^{注9)}

すなわち、英字新聞でのサトウによる日光評価に、文化歴史的な興味だけでなく、さわやかで健康増進のできる心地よい環境という言葉があったからこそ、一言でいえば「憩いの地」という言葉があったからこそ、この第5条に日光が他の有名な温泉保養地等4か所と共に指定されたと言えよう。

そして実に象徴的なことに、日光が健康増進の地として指定された翌年に発行したガイドブック (*A Guide Book to Nikko*) では、前記の文章「快い環境～何も必要ない」は、削除されている。^{注10)}「健康増進の憩いの地」との認識は、政府に認められ周知のこととなったので、役目を終えたのである。

第3節 自然への注目 ～登山と植物愛好～

サトウの与えた日光の新たな価値、「自然を好む人にとっての、健康的な憩いの地」は、外国人が夏休みを過ごす地として日光が発展していく源となる。避暑地としての過ごし方は、第5節で述べることにして、本節では、自然という価値の発見が、彼の個人的な興味をも増したことを明らかにしたい。すなわち、英字新聞で自ら指摘した「近隣を探検し、魅力的な場所を見つける」ことは、自然を好む健脚家サトウにとって、登山と自然探索につながった。

サトウは、明治2年からの賜暇休暇中、父母とドイツ・スイス旅行へ行き、アルプス山岳を巡った。そして日本へ再び帰任してからは、情報収集のため各地を巡るのだが、それが山を含むことが多い。富士山も日光も然りである。日光へは4回訪れ、中禅寺坂も難なく上り、男体山や周囲の山に登攀している。金精峠から湯元に下りるときに日本の案内人が道に迷い、野宿をするというハプニングもあったが。

植物を観察し採集し標本とすることにも余念がない。それを如実に示す手紙が残っている。植物を介して急速に親しくなった、横浜の弁護士ディキンズに宛てたもので、明治10（1877）年9月、上記のハプニングのあった三回目の日光行きから帰宅したときにしたためた。

日光や、日光に至る途中で、まだわれわれが採集していない植物にはほとんど出会いませんでした。唯一の例外は、日本人がトコワラビと呼んでいる珍しいシダ類の植物です。（…）男体山で、どちらも実を付けたブナとヤマナシの木を見つけ、標本を持ち帰りました。このほかにも、注目すべき木については、すべてそうしましたが。（…）だれに聞いてみても、日光の場合、五月中旬が植物採集にいちばん適した時期だそうです。あなたから借りた双眼鏡は大事に持って帰りました。お礼とともにお返ししますが、非常に役に立ちました。^{注11)}

ここでサトウは、高山植物観察は初夏が相応しいので9月に行ったことを悔しく思いながらも、山中では、借りた高価な双眼鏡を大切に手にして、遠くの植物までくまなく観察する。手の届く物は採集して現地であるいは帰宅して標本を作る。野宿というハプニングがあったのに、疲れは見せていない。自宅でも採集植物の種別や

名前などの調査に嬉々として取り組む。このように熱中する姿が眼に浮かぶ。

働き盛りの外交官サトウがこの時ばかりは趣味にのめり込み、34歳の脚力も集中力も注ぎ込んだ、登山家・植物研究者サトウになっているのである。その理由は、来日して15年を経ても日本限りの通訳書記官に留まるというキャリア上の苦悩があり、その心の澱を日光という植物の宝庫で癒しているといえる。まさに、「健康増進の休息所」であった。

しかし、サトウは日光を、個人的に愛好する登山と植物採集の地だけで終わらせない。この地を世界デビューさせたのである。

第4節 『中部・北部日本旅行案内』

～日光の世界デビュー～

領事部の通訳書記官サトウは、任務である国内情報収集と地誌研究の発表に、精力的に取り組んだ。たとえば明治5（1872）年に発足した「日本アジア協会」は、バジルホール・チェンバレンによれば、「日本および他のアジア諸国に関する題目について知識の収集と調査」^{注12)}を目的とした重要な機関であるが、サトウはこの研究会や紀要論集をリードした。

その流れから、明治14（1881）年、サトウとホーズ共著の『中部・北部日本旅行案内』（*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*）の出版の運びとなり、これは日本地誌研究の金字塔と言われる。

この旅行案内は横浜のケリー社から出版したのだが、サトウは、その時からロンドンにあるマレー社の有名な赤表紙のガイドブック・シリーズ “*A Handbook for Travellers in ～～*” を念頭に置いていた。このケリー社版はすぐに売り切れとなったので、序論すなわち日本の説明のページを増やして第2版用の原稿を用意した。

すると、この第2版を、ジョン・マレーが同社のシリーズに加えたいと要請した。これは極めて稀な例で、マレー社がいかに早急に良質な日本案内を出版したがついていたかが分かる。その結果、今日では、明治14（1881）年のケリー社版をマレー社第1版、明治17年の1884年版をマレー社第2版として扱っている。この第2版はロンドンで千部印刷され、多くの外国人が携行して来日した。

日光は、ここに、文字通り、ロンドンから世界デビューを果たした。

『中部・北部日本旅行案内』であるから、西は東京から東海道を経て神戸までと、北は東京から奥州街道の山形までが、主街道に沿って、すなわちルートごとに紹介される。日光は「ルート52」として、奥州街道からの支線（Branches from O-shiu Kai-do）で「日光とその周辺」として登場する。^{注13)}

ここでは、交通、宿泊情報、歴史、満願寺（輪王寺）・東照宮、本宮神社・仏の岩・裏見が滝、さらに、男体山・大真名子山・女峰山、中禅寺湖・湯元まで、実に具体的に紹介される。登山情報と湯元が加わったことも、サトウらしい。

特筆したいのは、どの項目も、好奇心旺盛な旅行者の冒険心をくすぐると同時に、安心情報も満載であることである。江戸の創始者の霊廟があるという歴史文化情報、「簡単に二日で行ける」との交通情報、外国人の「要望に応じてくれる」ホテルがあるという宿泊情報、日光や中禅寺は夏に涼しいという気候情報は、在京外国人だけでなく、あるいは冒険好きのグローブ・トロッターだけでなく、普通の日本への旅行者にとっても役立ち、魅力的な地という印象を与えた。

実に、これまでの日光とは違う、安全で好奇心も満足させる心地よい訪問先という価値が、広く世界に示されたのである。サトウ自身は、

明治16（1883）年に賜暇帰国し、翌年に英国から次の外交のキャリアを目指してバンコックに赴任する。発つ前に、日光に大きな貢献をしたと言えよう。

この案内書のおかげもあり外国人の注目をさらに集めた日光は、翌年の明治18（1885）年には、宇都宮まで鉄道が開通し、数年後には日光に新しい外交人専用ホテルが開業していく。そして、修験道の坂であった中禅寺坂につづら折りの道幅を拡げた新道（現在のいろは坂）が開削され、新道経由で中禅寺湖畔に資材が運ばれて、レーキサイトホテルが建つのも、10年後のことである。

そのときに、日光はふたたび、サトウを迎える。公使として明治28（1895）年のことであり、さらに新たな価値が加わる。

第5節 避暑地日光

～中禅寺湖畔の外交団別荘生活の誕生～

明治28（1895）年7月28日、サトウは12年ぶりに館長である公使として再来日すると、日光の歴史に新たなページを加えた。日光の中禅寺湖畔に別荘を建築し、大正昭和にかけて花開く外交団の別荘生活の先駆けとなったのである。

その行動は素早かった。8月20日、日光経由ですぐに中禅寺湖畔の借家に入るが、「小さくて、あまり快適とは言えない」^{注14)}ので、湖畔の砥沢に土地を借り、別荘を新築することにした。秋には準備に取りかかり、翌年5月にコンドルとボートハウスの位置を決め、7月から住み始めた。8月にはイザベラ・バードこと、ビショップ夫人を迎える。

思えば初めて来見した29歳のとき、英字新聞に「自然を好むなら、近隣を探検すれば魅力的な場所が沢山あり、さわやかで健康にも良く、日本の最も心地よい憩いの地」として日光を推

薦したのであるから、自ら「憩いの地」に家を建てたのも当然であろう。初めて来たときサトウは、通訳官であり、途中で通訳書記官に昇進しても、とても家を建てたり借りたりすることなど想像すら出来ない。大好きな植物を観察するために双眼鏡を購入するゆとりもなく、知人に借りて気を遣いながら大切に使い、お礼とともに返却した。

しかし今回は違った。ここ中禅寺湖畔で、イギリス公使として別荘生活をリードした。親しいベルギー公使ダヌタン男爵も自分を真似て同じ年から家を借りていた。ことにダヌタン夫人のメアリーはイギリスの上流階級出身の活発な女性であり、東京だけでなく中禅寺湖畔でも外交団の中心的存在となる。ランチ、お茶、ボート遊び、そして週末のボートレースといった社交が始まった。田母沢御用邸に滞在された皇太子もたまに中禅寺湖畔へ上がっていらした。^{注15)}

サトウの帰国後は、イギリス大使館別荘となり、代々の大使と館員家族に喜ばれていたが、平成25年に栃木県に譲られ、現在はイギリス大使館記念公園として公開されている。

このように、時代を画した中禅寺湖畔の外交団の別荘生活への先鞭をつけたのは、サトウ公使であった。その日光への思い入れの深さは今述べたように、初回訪問時にさかのぼり、書記官時代の登山と植物愛好も大いに関わっている。しかしもう一つの特別な思いがあった。日本の家族との交流の場である。

明治5（1871）年頃、サトウは武田兼を日本での内縁の妻とし、長女（1872～1873）は没したが、長男栄太郎（1880～1926）、次男久吉（1883～1972）の二人の息子をもうけた。当時の英国人社会の常として現地の女性を正式な妻として迎えることはなく、サトウは日記にも直接は言及しないほど、家族に対し慎重な態度を

取った。しかし、飯田町、つぎに富士見町（現在は千代田区）に家を用意し、戸塚（現在は新宿区）にも別荘があった。他に結婚することはない、死ぬまで兼を気遣う手紙と送金を続けた。とはいえ、慎重さは館長時代も変わらない。日記には頭文字の記述のみである。

そのような中、共に過ごすのに問題の少ないのが、東京を離れた休暇先の日光である。子供たちを山内の寺院や塔頭に逗留させ、やがて武田のために家も建てた。そして植物採集をしながらの散策、あるいはボート漕ぎを共にした。久吉が学生服で櫓をこぎ、サトウがリラックスする姿の絵が残っている。^{注16)} この久吉こそ、少年時代は毎年日光の山を登り植物を採集し、やがて山岳会の創始者の一人となり、理学博士になり、有名な『原色日本高山植物図鑑』を上梓した人物である。

そこで、次章では武田久吉を通じて日光を考えていきたい。父サトウ公使が日光に与えた「憩いの地」と「外交団の別荘生活」という価値が、外国人向けだったとすれば、次の世代の久吉を通しての日光は、日本人の中での価値を与えたからである。

第3章 武田久吉

～受け継ぎ次へ繋げた、植物観察～

第1節 日光の植物と山

～江戸時代の本草学者～

明治10（1877）年9月、サトウは「健康増進の憩いの地」日光で、山を歩き植物を採集して、その種を確かめた。その時の手紙では、「だれに聞いてみても、日光の場合、五月中旬が植物採集にいちばん適した時期だそうです^{注11)}」と述べる。すなわち、明治の初め、すでに植物採集に分け入っている人々が複数存在したということである。

実際、江戸時代から山に分け入った人々がいた。それは「日光結構」と謳う参詣とは異なる一面で、薬草を中心とした。漢方の薬用になる植物を求めて、本草学者や採薬使が来山して採集したのである。

そもそも日本の本草学は中国伝来の植物中心の薬物書、本草書の学習に始まるが、実際の植物観察を取り入れたのは、貝原益軒の『大和本草』（宝永9年、1710年）からである。

本節では日光の山へ採集に分け入った主要な人物として、植村政勝（1695－1777）と小野蘭山（1729－1810）に言及したい。^{注17)}

植村政勝（1695－1777）は徳川吉宗（1684－1751、第8代将軍在職1716－1745）に随行して江戸に来て、和歌山に引き続き御庭方勤めをした後、幕府の駒場御薬園の開設にあたった。殖産興業をすすめる吉宗は、朝鮮人参など高価な輸入品であった薬草木を国内で採集し栽培することを図り、従来からの小石川につづき、駒場御薬園を開き政勝に託したのである。ここに、政勝の生涯をかけての任務が始まった。すなわち、諸国へ向けて高価な人参をはじめ薬草の見分に出かけ、（稀に隠密等の御用もあるが、）江戸に戻るとその種と苗を育て、また、吉宗が鷹狩など駒場に赴いた時には、直接に諸国の報告をするのである。

植田家の『先祖書』によると、政勝の採薬の行先は、享保5（1720）年の第一回から日光で、目的は人参見分であった。しかも最終任務地も宝暦3（1753）年の日光で、結局合計18回日光を訪れた。日光採薬がいかに彼の大きな仕事であったかがわかる。

小野蘭山は京都に私塾を開き薬草調査以外は読書と抄写を楽しみとしていた本草学者であるが、寛政11（1799）年71歳のとき、幕府の医学

館に呼ばれ医学を講じた。初めて出かける採薬は御用となり費用も支給されて、1801年の4月から5月にかけて実行された。その行先はなんと蘭山の場合も日光であった。

筑波（常州）から日光（下野上野）へ向かい、男体山（黒髪山）や白根山に分け入った。江戸に戻ると、『常野採薬記』を報告し、公務の記録として残した。国会図書館のデジタルデータ『日光採薬記』によれば、人参をはじめ、各山での植物の形状記述も詳しい。その後も幕府御用として諸国を採集して歩き、講義は『本草綱目啓蒙』48巻としてまとめられた。本草教育の充実を図り、後世の自然研究へとつなげたのである。

しかも本草学者の当時の心得として、蘭山は図絵にも秀でていた。京都時代の宝暦13（1763）年上梓の『花叢』は、島田充房との共著だが、精緻な植物画は美しく、簡潔な解説文（例えば、「ウコン、ショウガ科、芳香性健胃」）と共に植物図鑑として高い評価を得た。後にフランス人のサヴァチエ（1831－1891）は、同書をフランス語に訳して *Livres KWA-WI* として出版したほどである。

こうして、日光の山に分け入り、植物を観察し、写生し、採集し、持ち帰って種から育て、駒場のあるいは小石川の植物園を充実させ、医学館で指導にあたるのが、江戸時代の本草学者の重要な任務となっていたのである。幕府からの学者一行には、案内役として日光領内をはじめ各地で登山路や植物群生事情に詳しい案内人が従っていたはずで、本草学者たちと彼らとで書物の知識と実際の植物の情報交換がなされたことも、当然予想される。

また、このような専門的な本草学を目的としなくとも、植田孟縉の『日光山志』が谷文晁ら当代の画家による名所および植物図絵を含んで

いたことを思い起こせば、日光の山に分け入り、植物を観察し、写生したものを記録に残したいという意図は、江戸時代から存在したと言えよう。

人参をはじめとする薬草や高山植物の宝庫、すなわちハイマツが育つ典型的な高山植物地帯が、女峰山などの日光連山に広がっている。幕府御用で何年かに一度、摘まれたとしても、宝庫にはまだまだ存在する。

第2節 植物と絵画 ～明治の文化サークル～

幕府御用の人参見分時代が終わると、日光の山へ向かうのは、植物研究者だけでなく、美しく可憐な高山植物に魅了され、それらを愛好するという新しい目的の人々も加わった。通訳書記官サトウは借りた双眼鏡を手に植物観察にいそしみ心を癒されたので、この流れの先駆けといえるが、日本人もやがて、その価値を見出した。はじめは研究者、そして在野の愛好家たちであった。すなわち、伊藤圭介から東京大学の小石川植物園へつながり、植物園の矢田部良吉、松村任三を経て、牧野富太郎を通じて在野の植物ファンに広がっていく。そして日光に植物を愛する文化サークルが誕生したのである。

尾張本草学で名高い名古屋に生まれた伊藤圭介(1803-1901)は、小野蘭山の弟子水谷豊文さらにはシーボルトに学び、業績としてはツェンベルクの書に和名を対応させた『泰西本草名疏』(1829年)を出版したことで名高い。明治になると早くも3年12月に大学出仕を仰せつかり、明治8(1875)年から小石川植物園に出向いた。明治10年75歳の時、設立と同時に東京大学の員外教授(定数外)となり、大学講義ではなく植物園で調査研究を行った。同定依頼も数多く、明治13年12月にはサトウも依頼している。^{注18)}

その伊藤圭介が本草学の知識を応用した調

査・同定をしているとき、米国コーネル大学で学んだ矢田部良吉(1851-1899)が東京大学初代植物学の教授に任命された。その後は、ドイツで学んだ松村任三(1856-1928)の時代になっていく。矢田部と松村は従来の本草学とは一線を画し、日本の植物相を構成する種の解析を解剖などで研究し、未知の種に自ら学名を与え発表した。もっともこれまで和名で呼びならわされてきた植物は学名もそのように提示するなど、本草学と近代植物学を接続させた。

そして日光との関わりで言うと、矢田部が松村らを伴って、最初に採集旅行に出向いた地が、なんと、またしても日光なのである。明治10(1877)年7月下野日光であり、彼らが設立した東京大学植物標本室に収蔵された最初の標本となる。江戸の本草学者以来の日光に関する伝聞と評判は、なおも続いていたのである。

この植物標本室に貢献した後継者、牧野富太郎(1862-1957)は、植物分類学を研究したが、大きな業績としては、植物についての知識を全国規模で普及させたことである。各地の啓蒙活動を通じ、郷土の植物研究家を育成した。栃木県では小学校訓導から師範学校教諭となり下野植物同好会を創立した関本平八(1889-1969)が、牧野との親交が深かった。

明治時代、この牧野博士の来見を楽しみにしていたメンバーに、画家の五百城文哉(1863-1906)、弁護士で登山愛好家の城数馬(1864-1924)、そして若き日の武田久吉(1883-1972)がいたのである。^{注19)}

明治期、日光在住の植物愛好者の動きは、明治25(1892)年の画家五百城文哉の日光への移住から始まる。五百城は水戸藩士の父を5歳の時に失うが水戸市の小学校(横山大観と同窓)で優秀な成績をおさめ、15歳で小学校授業生として下級生を教える。しかしすぐに上京し、21

歳のとき農商務省林野局雇となり、同時に高橋由一に入門し、小山正太郎の画塾にも学ぶ。風景画や肖像画を描き賞もとるが、27歳頃から諸国を巡り歩いては肖像画などで生活する。藤田東吾像が知られている。29歳、シカゴ博覧会に出品する「東照宮陽明門」を描くために来見し、この作品制作を契機に日光に住むこととなった。

明治25（1892）年といえば、ちょうど外国人の日光での避暑が盛んになって来た頃である。交通の整備としては、2年前に鉄道が宇都宮から日光駅まで伸長した。外国人向けのホテルとしては、4年前の日光ホテルに続き、この年、新井ホテルが隣接してオープンし、翌年の明治26年に現在の地に金谷ホテルが移転し、本格的な外人向けの営業を開始した。前章で述べたように、サトウのマレー社版ガイドブックのおかげで、日光は欧米に知られるようになっていた。ちなみに、日光通のサトウ自身は、公使として赴任した明治28（1895）年には、山内は混みすぎるからと中禅寺湖畔に別荘を建てたほどである。それだけ国際観光地となってきたといえる。

そうした日光で、五百城は、東照宮や輪王寺をはじめ名所絵の風景画を外国人のお土産用として水彩で描いた。技術力の高い五百城による放浪時代の肖像画はリアルすぎる傾向があるが、日光の匠の見事な「結構」を細密に描くと、仲立ちの画商もいて、売れたのである。32歳、居を構え、二度目の家族も持ち、写生に歩くうちに自然と植物にも興味を持つ。33歳の頃、訴訟で日光を訪れた弁護士城数馬と知り合い、高山植物の趣味を通じて終生の友となる。福田たねや地元の小杉放菴が弟子入りし、小杉とはよく山に入った。

ところで日光へは景勝を求めて、明治の初めから画家たちが訪れている。たとえば、河鍋曉斎は弟子のコンドルと中禅寺湖を訪れるし、山岳画家となる吉田博も若き日から訪れ、黒田清

輝は五百城を頼りここで大作「昔語り」を制作した。しかし、日本初のロックガーデンを自庭に作り、採集した植物を植え、栽培し、観察し、写生し、およそ百枚ずつ二組の「高山植物写生図」を残すほどの画家は、五百城だけである。

五百城の植物画は二組あり、性格を異にする。一組は東京大学所蔵の「日本高山植物写生図」（『日本山草図譜』として八坂書房より刊行）で、植物を詳細に記録した資料のようであり、もう一組は松平家所蔵の写生図（『晃嶺の百花譜－五百城文哉の植物画』として水戸市立博物館より刊行）で、生息している背景も描き鑑賞用の絵画といえる。前者は江戸時代の小野蘭山をはじめとする植物研究者は絵も秀でるという本草学者の伝統を引き継いだと評価できるほど、標本資料として科学的でしかも美しい写生図である。後者は、画家としての本領発揮で遠見の山々あるいは岩場や草地も描く一幅の水彩画として残したといえる。

五百城宅は植物愛好者がつどい、牧野も日光採集の時は必ず滞在し、啓蒙活動をした。明治34（1901）年に東大植物園の日光分園の相談が、五百城宅で松村任三小石川植物園園長、城数馬によって行われたのも自然の成り行きであり、東照宮宮司の中山信徴の協力も得て場所も決定した。松村、中山、五百城は水戸藩ゆかりの出身であった。翌年、11月、日光分園が開園した。ちなみにサトウの最後の日本訪問は、明治39（1906）年清から英国に戻る途次なのだが、武田久吉はサトウをこの植物園に案内した。

また、五百城と城数馬とはほぼ同い年で、固い友情を結んだことは特筆に値する。すなわち山に行き新種のラン（牧野による和名は女峰千鳥、ニョホウチドリ）を採集したり、東京で子爵たちと山草会を結成したりといった交流を生涯にわたり続けたのである。さらに光栄なことには、皇太子（後の大正天皇）も明治33（1900）

年に五百城宅を訪れ、キバナノコマノツメを見ている。前年から田母沢御用邸にお住まいで、五百城宅とは近かったとはいえ、五百城の植物を育てるロックガーデンが日光で有名だったことの証である。

明治38（1905）年に42歳で病没したのは惜しまれるが、独自のボタニカル・アートも、日光の結構を細かく描きその精緻な技量を発揮する水彩画も、近年その評価は高まっている。ことに植物愛好仲間、山草会の久留島子爵の為に描かれた『百花百草図』（栃木県立美術館蔵）は、ユートピアを示すかと思うほど見事な水彩画である。

この植物を中心とした文化交流の場を、まばゆく思う少年がいた。武田久吉、サトウの次男である。採集した植物名を高校生ながら牧野博士に問い合わせたし、20歳年下にもかかわらず、久吉は牧野、城の山行に同道させてもらい、五百城宅も訪れた。久吉と日光について考えたい。

第3節 久吉の山との出会い ～父と日光で～

明治16（1883）年3月、書記官サトウに次男、武田久吉が生まれた。サトウは賜暇休暇で帰英しており、そのあとバンコク勤務に直行したので、サトウが久吉に初めて会うのは、翌年明治17（1884）年10月6日、バンコクから日本に休暇滞在したときであった。横浜港からその足で武田家に向かい、ローマ字で日記に初めて記したのが、久吉は「シロク、ワガ オトウト Theodore ニ ヨクニタリ」という文章である。^{注20)}

サトウの武田家への態度が慎重であるのは、明治時代の常である。しかし、この休暇の際に富士見町に旧旗本屋敷を購入し、公使時代は、戸塚に郊外の家を借り、日光山内に夏の家を用意した。日本勤務が終了しても、英国には家族を持たず、武田兼に送金をつづけ、長男栄太郎

を英国に呼ぶが、虚弱なので米国に転地療養させた。次男久吉は英国で勉強させ、帰国後結婚した久吉に孫娘が生まれると喜び、会いたいと述べた。このような事実を見ると、当時のイギリス人の父親として、サトウはたいへん誠実に武田家に接したと言える。^{注21)}

本稿では、公使時代の、すなわち明治28（1895）年7月28日から明治33（1900）年5月4日のサトウと、12歳から17歳の久吉の行動とを重ね合わせて考えたい。

ところで久吉は植物研究の他に、後年、柳田邦男の影響もあり民俗文化の研究もする。すなわち、頂上を目指す登山だけでなく、山麓や里山を歩きながら人々の暮らしを研究したのだが、その中でも庚申塔に関心が深いのは、じつは、戸塚（日記では源兵衛村と書くことが多い）の家の傍に庚申塚があったからと思われる。少年時代、週末は戸塚の家で過ごすことが多く、時には土曜日など、父サトウも来宅して食事やお茶を共にした。明治33（1900）年4月21日の日曜日、「親子三人で最後の食事^{注22)}」をしたのも、ここであった。このように、父と過ごす場所は男子にとって、思い入れの深い場所である。そして、その最たる例が、日光である。日光を通して、登山と植物に惹き付けられていったのである。

久吉の『明治の山旅』から、山との付き合いをたどってみたい。ところで、同書は晩年に執筆されたものだが、久吉は博覧強記で記憶力も優れていたと言われる。筆者も登山ノートを実見したが、実に丁寧で緻密であった。同書に見られる少年時代の出来事は、昨日のことに、鮮明に綴られている。^{注23)}

『明治の山旅』によれば、山への興味を兆したのは、明治28（1895）年の夏、小学生のとき、母と兄と妙義に行った時のことである。岩場の

一つ、旭獄に

カノコユリが一輪、花まさに満開でほほ笑んでいるではないか。私は狂喜した。兄も手伝ってくれて、その根の球を掘り取って、大切に東京に持ち帰って植えたのが、翌年も花をつけたのは嬉しかった。^{注24)}

ただ登るだけの登山ではない、花を愛で育てる楽しさを実感したのである。そしてこの年、サトウが公使として日本に赴任して、子供たちにすれば、父帰る、である。公使のサトウは、8月に箱根宮ノ下の富士屋ホテルにまず行き、下旬、日光中禅寺に滞在した。この時は家を伊藤浅次郎から借りたが、翌年からの別荘の手はずを整えた。

そしていよいよ明治29(1896)年、久吉は、『明治の山旅』によれば、「妙義山で山の味を覚えた翌年の夏には、一ヶ月を日光で暮らすことになった。^{注25)}」境内も広く建物も大きい浄光寺という名利を家族で借りた。寺には小僧がいてその友達数名とともに、川で泳ぎ、憾満が淵で遊び、ある時は小僧を道案内として山にも登った。ハイライトは湯元に「一家揃って出掛ける。八月のある日、^{注25)}」のことである。大雨の中、子供たちは徒歩で菖蒲が浜から湯元に向かうという、それなりの冒険をした。しかし「観賞する余裕^{注25)}」などないと言っているにもかかわらず、戦場ヶ原の前はシラカバの多い林で、戦場ヶ原は寂しい光景だがカラマツの太木は数多くあった、と、記憶している。

これを、公使となった父サトウの日記と重ねると、明治29年7月13日に「日光行きのことについて、富士見町に行く^{注26)}」とある。サトウ自身は、この年の夏から、新築の別荘を中禅寺湖畔に所有している。初めてのゲストにイザベ

ラ・バードことビショップ夫人を迎え、毎日のように往來を日記に記すが、8月26日から31日までは空白である。この数日間、下の日光のお寺に滞在している武田の家族と、湯元方面に出かけたと考えられる。久吉の「一家揃って」という言葉に、13歳の少年のはしゃぐ気持ちが表れているのではないか。

明治30(1897)年の夏休みには久吉は関西方面へ出かけたので、次に山を訪れたのは明治31(1898)年のことであり、久吉にとって二回目の日光である。

今回は前回見落とした所を訪ねたり再訪したり出来ると、とても楽しみに出かけた。ことに「中学で習った植物学が役に立ち深く観察」でき、「山地の植物に対する興味がいよいよ深くなるばかりである^{注27)}」と、期待感でいっぱいであった。「今回の本拠は、(…)浄土院で、住職は後に門跡となれた今井徳順師^{注27)}」である。

この明治31年の夏から久吉15歳は本格的な山行を始める。きっかけは「八月の半ば過ぎに」、裏見の滝のずっと上流に位置する地図にもない慈観の滝へ、裏見の滝で茶屋を出している大貫乙助の案内で、家族で観瀑に行ったことであった。その折、右に女峰山、左に男体山、間に大真子、小真子の二山が連なるといふ眺望を目にして、ぜひ行きたいと願った。

私達の遊意は大いに動いたが、その当時には、山は危険だというのが世間での通念であり、登山の許可はなかなか下りそうもないのであったが、この四峯を、二日掛りなら上下することは容易だと、大貫の保証した結果、幸いにも許可が出て、それから数日後、それを実行に移すことが出来たのである。^{注27)}

こうして大貫の案内を得て、兄弟は、女峰、真子を巡り、志津の行屋に泊まり、男体から中禪寺に下るといふ、一泊二日の三山がけを果たした。

ここで注目したいのは、武田家が、「山は危険」なので案内が必要という常識を持つ一方、10代の兄弟の登山への「遊意」を後押しする積極的な教育方針を持っていたことである。次に述べるが、当然その許可には、父サトウの判断もある。さらに、この山行の思い出として、オオバギボウシやオヤリンドウといった花々、コメヅカ、シラビツ、さらに、「話に聞き、絵にも見たハイマツが見参に入る^{注27)}」と記録する。久吉は、府立尋常中学校（現日比谷高校）の植物学教師、帰山信順に植物観察と描画という実地教育を受けていたので、^{注28)} その実見は、まさに感動であった。ハイマツには、「見参」という言葉を使い、まさに高貴の対象にお目にかかった気持ちである。今でこそ、高山地帯に観光バスで行き、ハイマツもおなじみであるが、当時としては山に分け入った者だけが「見参」できる高嶺の植物、高嶺の花、であった。その感動が素直に伝わる。

ところで、サトウ公使の明治30年と31年の動向を確認したい。明治30年は5月から11月まで英国に帰っているため、武田家が日光ではなく、関西方面に行ったことも合点がいく。明治31年は、早くも2月から中禪寺に滞在し、5月以降9月まで東京と中禪寺を往復している。8月も当然滞在しているが、家族のことは慎重を期しているため言及しない。8月6日から13日の日記によれば毎日外国人たちとの交際をしており、13日から18日まで東京泊で、19日に東京から日光に帰った。

ここで、唯一、「8月19日」に、「浄土院を訪れる^{注29)}」とだけある。中禪寺へ上がる前に、山内の浄土院にいた武田家を訪れたのである。

しかし昼食は日光ホテルで同国人と会食する。ただし、午後から夕方については一切記述がないので、武田家と一緒にいた可能性が高い。翌日の12時には、中禪寺湖畔を歩いている。

したがって、『明治の山旅』にある「八月の半ば過ぎに」家族で大貫の案内で慈観の滝へ出かけた観瀑行に同道はしていないし、まして、三山がけに同行はしていない。しかし、浄土院訪問は「8月19日」なので、すでに慈観の滝からの素晴らしい眺望を目にしている息子たちから、三山がけの相談は受けたと十分に推測できる。そして、案内人があるなら許可を下せるのは、明治時代の家族方針の決定者としては、母の兼ではなく父のサトウであったと言える。「山は危険」というのは母で、「大貫の保証」があれば条件を付けたのは父である。「幸いにも許可が出て、」という久吉の素直なホッと示す言葉が示すように、父の判断と後押しがなければ、十代の兄弟は行けなかったのである。

明治32（1899）年については、『明治の山旅』に記述はないが、サトウ公使日記には、頻繁に源兵衛村訪問が書かれ、日光に土地を借りて武田の家に別荘を用意した。^{注30)} 父サトウ自身も、1月から中禪寺滞在を繰り返し、8月は20日間、過ごした。例のごとく、慎重なサトウ日記に家族についての言及はないが、学生服姿の久吉がボートを漕ぎサトウが乗る絵が残っているので、そのようなこともあったであろう。^{注16)}

明治33（1900）年、サトウは、5月4日に駐清公使として北京へ向かうので、4月6日から9日の中禪寺滞在が最後となった。湖畔の別荘は後任の駐日公使マクドナルドに譲渡し、以後、イギリス大使館別荘となる。武田家の兄弟にとって、父はまたしても、去っていった。

しかし、久吉は父の代わりというべき、師を得ることになる。そのきっかけが父の去った明

治33年の夏の植物採取という事実に、天の采配を覚える。

第4節 久吉の新たな師たち

～文化サークルから、山岳会へ～

久吉の新たな出会いは、植物採取を通じての牧野富太郎、五百城文哉、城数馬である。

『明治の山旅』によれば、明治32年発刊の『新撰日本植物図説』でシダの「見事な図と、牧野先生の詳細な記載」を見て、「世の中にこんなに珍しい菌糸もあるものかと、私は目を見張らざるを得なかった。^{注31)}」そこで明治33(1900)年の夏に、日光でそのようなシダ類のありそうな場所を採集して歩き、8月27日に、日光山内の行者堂で「清澄苔忍」を発見したのである。中学の師、帰山信順先生も榛名で「清澄苔忍」を発見したのだが、それに続き、新たな棲息地を発見したので、「鬼の首でも取ったように喜んだ」うえ、「その形態が、牧野先生の原記載と」一致しない点があり、標本を送って鑑定を願った。すると間違いなしとのお返事を頂き、「この大学者に親炙」することとなった。17歳の少年にとって、いかに嬉しかったことか。植物研究の啓蒙に努める牧野にとっては、当然の返答だったかもしれないが。

すると、この牧野を通して五百城たちと久吉の出会いが広がっていく。明治34(1901)年8月、牧野から日光の萩垣面の五百城宅に滞在するという来信があり、18歳の久吉は早速五百城宅に伺う。前年には皇太子が来訪したロックガーデンも久吉は見たはずである。そして、翌日の庚申草を探す女峰登山に誘われた。喜んでお供をしたのだが、その一行は牧野先生、城数馬、佐野常民伯爵令息、スイス人、人夫と久吉の6名である。途中の滝で皇太子の七瀑観瀑の催しに会うが、「殿下からお声が掛かって、雲の湧き立たぬ内に、瀑を見よとの有難い御淀^{注32)}」

を頂くという場面もあった。

そしてこの日に採集したユキワリソウを、久吉は東京本郷の薫風園での山草陳列会に第一回から出品し、好評を博すという縁を得て、以後、山草会にも加わる。

それだけではない。城数馬を中心にして、山岳会の設立に向かうことになった。久吉の「山岳会創立前後^{注33)}」によれば、府立尋常中学校の帰山先生の指導の下、動物、植物、昆虫の好きな学友たちで「日本博物学同志会」を作り『博物之友』を発行していた。一方、久吉はその頃『太陽』に山岳紀行文を寄せていた小島烏水と知り合い、小島を介して帰国前のウエストン牧師に横浜で昼食をご馳走になるという機会があった。するとウエストンから、英国のアルパイン・クラブのような会を創ったと勧められたことから、話が進んでいった。小島が篤志家の高頭仁兵衛を紹介し、久吉が重鎮として山草会の城数馬と、博物学同志会の若者たちを連れてきて、メンバーが整ったのである。小島烏水を会長とした「山岳会」が誕生した。城の法律事務所の書生たちが事務を見てくれた。明治38(1905)年10月のことであり、明治39(1906)年4月に『山岳』の第一号を発行した。植物だけでなく、登山へも関心の深い久吉には大切な会となる。のちに第6代会長となる。

久吉の登山は、方位磁針、アネロイド気圧計などの道具を使い、その中には父サトウから引き継いだものもあり、近代登山を開いたと言われる。双眼鏡とカメラも必須であった。筆者も実見したが、^{注34)} 久吉の携帯した登山ノートは薄く小振りで、そこに久吉は几帳面な字で非常に詳細に山行を記録した。天気、地点にたどり着くごとに時間を記し、発見した植物や見える景色を書く。もっとも、『明治の山旅』によれば、17歳の時、牧野のお供登山をする前、単独で女峰登山をして霧の中で道に迷うが偶々行者屋に

向かう男達と出会い、何とか事なきを得たというヒヤリとした体験もしたようであるが。

日光の植物と山があればこそ、久吉は植物に魅きつけられ採集に歩き、牧野たちに出会い、五百城、城数馬の文化サークルに参加できた。そして、山草会だけでなく、近代登山の先駆けとなる団体、山岳会の誕生という縁を得たのである。

おわりに

久吉はサトウと最後の中禅寺と金精峠行をした翌年の明治40（1907）年4月、札幌農学校の教師となる。そして明治43（1910）年イギリスに渡る。王立理工科大学植物学科に留学し、王立キュー植物園、バーミンガム大学にて研究をして、大正5（1916）年に帰国した。京都帝大、北海道帝大、九州帝大にて植物学の講師を歴任する。その間も各地の高山を歩き、その植生を調査し次々と論文に発表した。同時に、サトウと同様、筆の立つ久吉は、登山ノートを基に多くの山行記録を出版し、さらに得意とする写真を生かして有名な『原色日本高山植物図鑑』などを刊行した。そのおかげで、大正から昭和のアルプスのガイドたちは、高山植物の名前をおおよそ知っていたとも言われる。

久吉の英国留学と帰国後の植物学者という歩みも、さらには、金精峠の奥の尾瀬の保護活動に尽力したもの、原点は日光の山で教わった自然という宝である。

その意味からも久吉は、山を駆け巡った修験者たち、人參を検分した江戸の本草学者たち、標本を作製した植物研究者たち、そして双眼鏡を手に観察して心を癒した若き日の通訳生のサトウを、受け継ぎ、また、後世に伝えているのである。そして、父に日光という宝を教えてもらったように、久吉は二人の娘たちと山に登り、日光や尾瀬を歩いた。^{注35)}

サトウが明治39（1906）年日本での最後の2週間に久吉と訪れたのは、日光中禅寺とその周辺の山々であり、久吉が分骨されて眠るのは、初めての日光で小僧と遊んだ浄光寺であった。

（武田久吉の次女林静枝様に、筆者は数多くのご教示を頂きました。惜しくも、平成30年昇天なさいました。生前のご厚情に、感謝申し上げます。）

注

- 1) 本節は主に以下の文献を参考とした。
宮田登・宮本袈裟雄編『日光山と関東の修験道』（名著出版、2000年）
日光山輪王寺監修『輪王寺宝ものがたり』（東京美術、2008年）
日光山輪王寺宝物殿、財団法人徳川記念財団編『日光山と徳川四百年の文化』（日光山輪王寺、2004年）
稲葉久雄『日光東照宮 語りつぐ』（JAF MATE 社、2011年）
読売新聞社宇都宮支局編『知られざる日光』（随想舎、1994年）
- 2) 溝口周道「近世の観光に影響を与えた貝原益軒の紀行文の特徴」『ランドスケープ研究：日本造園学会誌』（平成14年）
植田孟緜『日光山志』（天保8年） 国文研データセット
馬場義信「植田孟緜と日光」『大日光』83号（日光東照宮、平成23年）
馬場義信『植田孟緜～雲は夢見る、世に事なきを』（かたくら書店新書、2011年）
なお、天保13年の参詣者数は、「旧日光市歴史年表」による。
- 3) 『日光叢書 社家御番所日記』第二二巻（日光東照宮社務所、昭和57年）594頁～596頁。

- なお、明治4年からの東照宮社務所日記は、刊行されていない。筆者は御文庫のご厚意で読ませて頂いた。井戸桂子「日光を訪れた二人のイギリス女性－イザベラ・バードとメアリー・ダヌタン」(駒沢女子大学『研究紀要』第19号、平成24年)
- 4) 本節は主に以下の文献を参考とした。
柴田宜久『明治維新と日光』(随想舎、2005年)
石川明範「保晃会」『日光近代学事始』(随想舎、1997年)
- 5) 「あの1862年から1869年にかけての7年間はわたしの人生で最も充実した時期でした。あのころ、私は本当に生きていましたが、」萩原延壽『遠い崖 10』(朝日新聞社) 135頁。
- 6) 井戸桂子「アーネスト・サトウにとっての日光中禅寺」(駒沢女子大学『研究紀要』第16号、平成21年)
- 7) “TRAVEL TO THE INTERIOR, YEDO TO NIKKO AND BACK March 1872”, *The Japan Weekly Mail 1870-1874* (Edition Synapse, 2010) p.173-p.174, p.185-p.187, p.203-p.205, p.223-p.225.
- 8) 同上、p.223.
- 9) 『大日本外交文書』第七巻(国会図書館蔵)、590頁から592頁。「 」内は、本文書よりの引用。
- なお、本節の允準条例成立の経緯については、井戸桂子「明治期の外国人避暑地～箱根と日光～」(『日本文化研究』第12号、駒沢女子大学日本文化研究所、平成29年)を参照のこと。
- 10) *A Guide Book to Nikko* (1875, Yokohama) (Edition Synapse, 1999) p.31.
- 11) 萩原延壽『遠い崖 13』(朝日新聞社) 336頁、362頁。
- 12) B. H. チェンバレン、高梨健吉訳『日本事物誌 1』(平凡社、1987年) 56頁。
- 13) Ernest Mason Satow, C.M.G and Lieutenant A.G.S Hawes, *Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* second edition revised, (London, John Murray, 1884) pp.440-461 (国会図書館蔵)
- 14) *The Diaries of Sir Ernest Satow, British Minister in Tokyo (1895-1900)*, Edited and annotated by Ian Ruston, (Edition Synapse, 2003) pp.17-18. (以下、*Diaries*と記す。)
- 15) 外国人と日光、サトウと日光については、井戸桂子『碧い眼に映った日光』(下野新聞社、2015年)、福田和美『日光避暑地物語』(平凡社、1996年)、飯野達央『聖地日光へ』(随想舎2016年)。
- 16) 『国際避暑地中禅寺湖畔の記録～英国大使館別荘記念公園一般公開記念誌』p.56 (同資料は国際日本文化研究センター蔵)
- 17) 本節は主に以下を参考とした。
吉田弘「植村左平次正勝採葉行」『東京家政大学博物館紀要』第14集、2009年、123-131頁。
小野蘭山『日光採葉記』国会図書館デジタル資料
小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』(八坂書房、2010年)
「重要文化財指定資料紹介 小野蘭山関係資料」『国立国会図書館月報』663号(2016年7月)
平野満「小野蘭山『採葉記』の成立と転写系統の検討」『駿台史学』124号(2005年) 1-26頁。
竹中祐典『花の沫』(八坂書房、2013年)
- 18) サトウが伊藤圭介に同定を依頼した例として、【カンキツ属の一種 *Citrus* sp. (ミカ

- ン科)】明治13年2月(「日本植物研究の歴史 小石川植物園300年の歩み」より)、並びに、【ムシトリスミレ】(小島烏水『アルピニストの記』より)などがある。
- 本節の植物学者については、主に、大場秀章編「日本植物研究の歴史 小石川植物園300年の歩み」を参考とした。関本平八については、栃木県立博物館の自然系テーマ展「郷土の植物家 関本平八」より。
- 19) 五百城文哉と城数馬については、主に以下を参考とした。
- 武田久吉「高山植物今昔談」『山と人・山岳』(日本山書の会、昭和45年)
- 寺門寿明編『五百城文哉 高山植物写生図』(水戸市立博物館、2008年)
- 中村有紀子編『やわらかな光と花に満ちた世界 五百城文哉の水彩画』(水戸市立博物館、2013年)
- 中村琰一「五百城文哉と城数馬の日光」『日光近代学事始』(随想舎、1997)
- 河鍋暁斎とコンドルについては、『暁斎絵日記』
- 20) 横浜開港資料館編『図説 アーネスト・サトウ』(有隣堂、平成13年) 92頁。
- 21) 前掲論文、井戸桂子「アーネスト・サトウと日光中禅寺」
- 22) *Diaries*, p.442.
- 23) 武田久吉の博覧強記については、杉本誠「解説－植物学と民俗学の見事な融合」、武田久吉『植物と民俗』(講談社学術文庫、1999年)
- 24) 武田久吉『明治の山旅』(平凡社ライブラリー、1999年)(以下、『明治の山旅』と記す) 24頁。
- 25) 『明治の山旅』 27－34頁。
- 26) *Diaries*, p.111.
- 27) 『明治の山旅』 35－39頁。
- 28) 府立尋常中学校で、久吉や同級の「日本博物学同志会」の生徒たちは、帰山信順(明治26年から36年、理科教諭)の指導の下に、当時訪れる人も稀であった奥多摩や丹沢へ出かけた。梅沢親光、河田黙、市河三喜がいるが、授業では半紙に筆で描画をした。市河の博物篇ノートとして残っている。(日比谷高校記念資料館より) なお、「山岳会」は、この「日本博物学同志会」の支会として設立され、英文学を志した市河以外の三名はその発起人になっている。
- 29) *Diaries*, p.300.
- 30) 久吉の次女、林静江氏によれば、浄土院の中に土地を借りて、建てたのではないか、とのこと。武田久吉は家族を持ってからも、子供たちを連れて日光に行き、今井師と親しかった。
- 31) 『明治の山旅』 39－40頁。
- 32) 『明治の山旅』 46頁。
- 33) 「山岳会創立前後」『山岳』第61年(1966年)より。『明治の山旅』付録、328－341頁。
- 34) 栃木県立博物館、自然系テーマ展「ジョージ・ルイスと武田久吉－明治日光の昆虫・植物研究の先人－」平成30年10月。示唆に富む本企画は、学芸部主任研究員、星直斗博士による。
- 35) 林静枝「或る年の尾瀬」(『父と子の山』中央公論社)